

対馬市佐須地域における 地域づくり会議の展開（２）

研究員 高木 英彰

本稿では本誌No. 144¹に続き、対馬市^{いづはら}厳原町の佐須地域において開かれた「地域づくり住民会議」（以下、部会）の後半部分（2015年10月～2月）および関連の取組みについてレポートする。

1. 部会の後半の流れ

前半部分では、①自然環境を保護すること、②伝統・文化を継承すること、③域外へ出た子供や定年退職者が戻ってこられる場所になることを地域の大目標とした。そして(1)地域エネルギー、(2)農林水産業、(3)医療・交通・高齢者、(4)防災を4大テーマとして近隣地区別に議論を行ってきた。問題に対応すべき主体が誰であるのかが検討課題として残されていることや、現地調査が必要な事項（島内の木質バイオマスの供給能力や小水力発電のポテンシャル等）があることにより、各課題に対する具体的方策が打ち出せる段階ではなかったが、議論の方向性を整理する上で、事務局において「佐須地域・自立型地域モデル事業計画<検討資料>」（以下、「検討資料」）を作成し、第4回部会においてそれをもとに住民による前半の振り返りと後半の議論の方針確認を図った。おおよその流れは表1のとおりである。

表1 各回部会および調査の概略

第4回 (10月)	・「佐須地域・自立型地域モデル事業計画<検討資料>」（事務局がとりまとめた素案）をもとに全体協議
第5回 (12月)	・地域エネルギー活用等に関するオランダ・オーストリア視察の報告 ・「農林水産業振興」「交通・医療・生活」「災害対策」「楽しみ・交流・学び」の関心別にグループワーク ・「佐須地区モデル事業 計画素案」をもとに協議
12月末 ～ 2月半	住民アンケート調査の実施 ・一般住民アンケート（高校生以上） ・小中学生アンケート（小学4年生～中学3年生）
第6回 (2月)	・佐須地域住民アンケートの中間結果報告 ・計画書案の最終確認のためのグループワーク

本誌No. 144, p. 24より再掲（抜粋）。

2. 「検討資料」の概要

これまで上記テーマを4つの柱に議論をしたが、例えば地域エネルギーはただ生産すればよいのではなく地域の強みを生かす用途を併せて検討すべきこと、防災には山林の活用・整備が重要なこと、などから、より複合

1 高木（2016）「対馬市佐須地域における地域づくり会議の展開(1)」『共済総研レポート』No. 144, pp. 22-27

的に取り扱うことが必要となった。また、子育て環境整備や地域学（歴史資産の保存や見学施設化等）、観光交流の促進に関する意見もあったことから、これらを取り入れる必要もあった。さらに、計画化にあたって実行の優先順位を決めるため、それを意識したテーマの組み替えを試みることにした。そこで「検討資料」では(1)ちょっと豊かな暮らしをつくろう（→農林水産業振興）、(2)安全な地域をつくろう（→防災）、(3)安心な地域にしよう（→医療・交通・生活）、(4)ちょっとした楽しみや交流を地域につくろう（→楽しみ、交流、学び）、に再編し、以降、呼称は変わりつつもこの枠組みで議論した。これは、取組みの経過順とは異なるが広島県安芸高田市の川根振興協議会の展開過程（小田切2010；p. 38）をベースとしたものである。地域エネルギーの活用については、それぞれに利用法がないか検討する形をとった。

11月には、市職員と希望する住民らでオランダとオーストリア（ギュッシング）を訪問し、海洋ゴミ回収技術や木質バイオマスエネ



部会における発表風景

ルギーの活用に関する視察を行った。12月の第5回部会でその視察報告を行い、地域と対馬市の悩みの種である大陸からの漂着ゴミの回収・処理問題や山林整備に関する意見交換が活発に行われた。

2月には議論のマイルストーンとして計画書を取りまとめることを目標に、区長会における意見聴取と、部会による最終の内容確認を行うとともに、地域に関する住民アンケートの中間報告を両方の会で行った。

3. 立ち上げ初年度における部会の成果

約半年間の軌跡として160頁強にわたる計画書²（各回議事録、アンケート集計結果等含む）を作成した。紙幅の都合上掻い摘まむが、ここに記された事項は以下のとおりである。

(1) 地域エネルギー

- ・漂流ゴミの回収とエネルギー化
市の提携団体が行う回収実験により効果を検証していく。
- ・域内木材の活用
木の駅システムを参考に、地域通貨等を組み合わせながら住民でも一定の協力報酬が得られる仕組みを検討し、薪やチップとして販売したり学校の薪ストーブに活用できるか調査する。
- ・小水力発電
専門家による現地調査によれば、小規模だが可能との見解であるが、発電量を推定するには水量調査が必要。農業への活用を念頭に協議を重ねる。

2 対馬市（2016）『佐須地域 自立を目指した地域づくり計画書』



佐須地域の農地



地域の拠点 体験出会い塾「匠」

(2) 農林水産業振興

・地産地消の推進

部会においても住民アンケートの結果においても「地域で生産されたものを買いたい、売りたい」という意見はあるが、島内に流通している農産物の多くは島外からであり、地域内循環が弱いため、直売所の設置や、地域拠点「匠」³の有効活用（交通、高齢者福祉と絡めて）を図る。

・地元製品のPR

トンネルの開通により地域間交流の拡大が期待できる。地元有志団体が取り組む佐須農業収穫祭を定期的かつ継続的なものにしてPRを進めるために、住民が協力していく。

・地元製品の開発

地域の主力農産物のシイタケに加え、高付加価値農産物の栽培実験を行い、地元事業者が事業化を目指している堆肥の活用による高収量化と合わせ農家への普及を目指す。

(3) 医療・生活・交通

・高齢者福祉

「匠」を高齢者の活動スペースとして活用し、外出したくなる動機づくりを図る。また「匠」への機能集約によって恩恵を受けない地区もあることから、集会所などをサブ拠点として同様の取組みを進めていく。

・地域完結型医療への転換

対馬いづはら病院が対馬病院に統廃合されたことにより基幹病院への交通利便性は低下した。そのため、診療所を中心としつつ、介護実習生、研修医、薬剤師を地域として受け入れるなど、地域包括ケアシステムづくりを進める。

・地域内／外交通

地域内はスクールバス混乗やデマンドバスで、対馬病院等への域外交通はコミュニティ交通や法的にクリアできればライドシェアの導入を検討する。

(4) 防災

・被災情報の収集とハザードマップの作成

部会の中で豪雨による被災情報の収集を行った。またハザードマップの作成は市とし

3 食事や、そば打ち体験、地域の工芸品である硯づくり体験ができる市の施設。地元の営農組織が指定管理を受けている。

てすでに進めている。

- ・河床の浚渫の要望
費用面や鉛毒の問題から極めて難しい課題であるが、安全が確保されないまま安心な暮らし、豊かな暮らしを議論できないため、長期的な目標としてではあるが県や市に要望していく。
- ・連絡体制の整備
先の夜間の水害でも安否確認が取れない世帯があったため、家族、近所等、連絡体制の構築を進める。
- ・被災記憶の収集・記録
9月の豪雨において佐須地域における人的被害は軽微であったが、他地域では危険を体験した住民もいた。そこで今後の災害対策や対応を学ぶ機会として体験談を聞くなど情報収集を行う。

(5) 楽しみ・交流・遊び

- ・小学校跡地の活用
施設が新しく、設備も充実していることから、域学連携として大学の研究拠点化などの活用を考える。
- ・民泊の拡大と観光資源の発掘
佐須地域には飲食・宿泊施設が個別的に民泊を行っている以外に乏しく、観光客も素通り傾向にあることから、地域として民泊に取り組んでいく。また、観光客が足を止める場所として、日没の見える海岸線など、地域の魅力を探し、観光資源となるよう住民の手で環境整備を行っていく。
- ・地域の歴史遺産の保存、活用
かつて地域を支えた産業跡を保存し、地域の歴史として紡ぐため、所有企業への働きかけを行っていく。

4. おわりに

豪雨災害以降の部会の後半は参加が難しくなった委員が多くなったが、むしろ災害を契機としてか地域で取り組む（取り組みたい）事柄の議論が膨らんだ感がある。当初は議論の整理とともに苦心したが、たった半年間の取組みで一定の効果を得たと思われる。ここで熱を冷まさぬよう、継続して計画の実現を一步一步目に見える形で進めていかねばならない。引き続き関係者と議論をしつつ活動をサポートしていきたい。

【参考文献】

- ・小田切徳美（2010）「最近の農村政策の動向と背景」『共済総合研究』Vol. 58, pp. 6 - 41.



「楽しみ、交流、学び」の議論